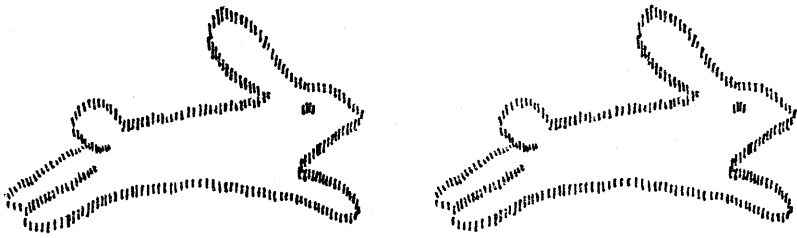


## 父親參觀日に話したこと

燕 木 寿 江



### —— 幼児期に幼児教育を ——

幼稚園というところをご承知のように、就学前の幼児に適当な環境を与え、心身共に助長することを目的としているところで、子どもの活動を洗いざらいひき出したところから六領域が生まれました。言いかえれば、「子どもが食べた食品を分析した結果、六つの栄養源からなっている」と表現した学者もいます。カルシウムがよいから、といってそればかり与えては消化不良をおこしますし、栄養だからといって錠剤だけを与えたのでは、生きる力にはならないでしょう。

願書を取りにいらっしゃる方が、「市ヶ尾幼稚園の特色は何ですか？」と言われます。ためらっていると、「音楽とか、体育とか、漢字教育とか、特別に力を入れているのは何ですか？」とつけ加えます。「特色がないのが幼稚園教育です」と言いますと、「具体的にどんな教育をするところなのですか？」矢継早に聞かれます。「文部省の教育要領に添って、幼児期に幼児教育をするところ

です。」と、ごくあたりまえのことを真剣に言います。まだ満足がいかないうるので、子どもの生活は遊びです。遊びを通して学んでいきます。と言うときまっで、「じゃあ一日中遊ばせておくのですか？」と問われます。遊びを通して学習するところです。例えば、「社会」の領域をとりますと、「個人生活における望ましい習慣や態度」「社会生活における望ましい習慣や態度」がうたわれており、その中には「友達の喜びをいっしょによろこぶ」という箇所があります。昨日、ほんとにどこに記されてあったかしら——と確かめました。見覚えのある鉛筆の線がついていました。この三十九年の教育要領というものは読み応えがあります。今回の改正では、「私立の独自性を生かし」という項目は、隠れ蓑的言葉で、一部教育産業化してしまった幼稚園もあり、この部分は削除されると、文部省の初等中等科教科調査官が言っていました。

——大黒柱——

「文部省に最初の対策協議会が発足し、長い眼で問題を解決していくことになりました」などと、ニュースでNHKのアナウンサーが真面目な顔で言っていると、情け無くなる場合があります。我が子の友達関係を（教師にとってもクラスの子どもは我が子でしよう）どうしてお役人さんに解決してもらわなければならないのでしょうか。それ程、家庭が精神的に貧困になってしまったのでしょうか。「育児は雑事」という言葉はやっぱり日本語なのでしょうか。「生命の電話」なるものもあります。が、このおかげで一命をとりとめた方もあったでしょうが、他人に電話をかけるのではなくて、おうちのお母さんに、そしてお父さんに話せないものでしょうか。お父さんは大黒柱である筈です。辞書を引くまでのことありませんが、「初建における大切な柱」とあります。もろもろの難問を一緒に考えてくれる大黒柱、お父さんに縫っていただければ大丈夫、安心と言った大黒柱に名実共に是非なっていただいたいと思います。あたりまえのことがあたりまえでなくなっていく今の世の中の流れを、一時

とめたいと思います。ここで立ち止ってみんなで考えてみたいのです。

幼稚園は、子どもの時計に大人の時間を合わせます。

大地に平伏して土と語っている子どもの時計を大切にします。どの時代に子どもに合わせられる時を持つことができるでしょうか。一時間目国語、二時間目算数、とすぐ小学校に入ったら、時間割に左右されてしまいます。

こまぎれ保育では、保育とは言えないでしょう。私のクラスの子どもが、こんなことを言っていました。「火と金がスイミングでしょう。土曜日がヤマハ、水曜日が英語、お父さん残った日に塾へ行けて言うの」と、訴えていました。これも人まかせの教育なのではないでしょうか。お金で人を雇っている。お金が支配しているようなもので、父親の義務を果していると言えるでしょうか、子どもが家庭で遊んでいるということがそんなにも不安なことなのでしょうか。目先の情報に流されないで、自分の子どもを可愛がるように人の子どももいとおしみ手をつないだら、その中の子どもの輪も広がって

くことでしょう。陰湿と言われているようなじめなおきないことでしょう。お母さんだけに子どもをまかせないで、お父さん、あなたが不断の大黒柱になっていたきたいと思います。

### —— 個性的ということ ——

NHKで、「二十一世紀は警告する」という番組をやっていました。難しいことは頭に残らないのですが、自分が必要なことは、不思議と聞いているものです。「文明の前に森林あり、文明の後に砂漠あり」の警告も、この開拓された地に住んでみるとよくわかる言葉であり、始めはブルドーザーの音が気になってしかたがなく、見る見る地肌をさらけ出す山が悲しかったのですが、だんだんに慣れてしまいました。「慣れる」ということは怖ろしいことですね。

その番組の中で五重の塔を修復したときのことグラフNHKに載っていました。「四隅の柱なども微妙に高

さが違うのですが、驚かされるのは、全部わざとふぞろいにしたのだとしか見えないということ。同じ長さに切りそろえるのは簡単な管ですが、当時の大工の棟梁がそれをせず、確かな目で全体をにらんで部分のそれぞれを個性的にしたのだとしか考えられません。その結果、完璧なまでの美を千年の風と雪に耐える堅実性が生まれました。画一的な部分からではなく、個性的だからこそ不ぞろいであり、従って自律性をもっているような部分の群れが一つになって初めて法隆寺や薬師寺の美と安定性がある。その事実には教えられるところが実に多い」と、チーフディレクターが語っていました。何か今の「教育」に対する警告のように響きました。

—— 子どもの目の高さになって ——

日本橋の丸善で行なわれている絵本の原画展に、いつの頃からかきまっていくようになりました。どんな絵本を子どもに与えたらいいか、とただ職業意識が濃厚で、

楽しみに……というより、がつがつとあさるように画面に喰い入り、人をかきわけて最前列にでて、眼鏡をはずして（老眼の為）顔を寄せて、作者の言葉を一字、一字読んでいました。ベルリンに生れたヘルメ・ハイネが、「ちょっとだけ死ぬことができないように、ちょっとだけ描くなんてできないから——」と、自分の絵の下に記されてあった言葉を見たらますます絵本作家が好きになりました。若者が……二十代の人達がいつも多いのが将来を見通すように嬉しく、その人達の楽しそうな雰囲気も大切にしたい、と思いつながら原画の世界に魅き入れられていきました。

この五月には、ユネスコ・アジア文化センター主催の絵本原画展に西武にいきました。スライドで見る絵本の世界の公開座談会もあり、会場は予約の葉書を持った人でいっぱいでした。グランプリをとった原画を中心にスライドで写しては説明してくださいました。児童文学者の渡辺茂男、絵本作家の杉田豊と、マリー・クリスティーナがその司会でした。お二人の先生の名前は生前の周

郷先生からよく伺っており、絵本を通して親しみを覚えていたので、すぐにその雰囲気の中に入れました。子どもの喜ぶ絵を大人側から見ているのかと思っていました。お二人共おっしゃることは、「世界中の絵本をつくる人達が、自分の子どもの日に帰って、その日に問いかけながら、いいえ、子どもそのものになって描いている。」ということをお伺って胸が熱くなりました。「これだ——。これなんだ。」世界の絵本作家の大人達が、世界の子ども達にどんな夢をたくすか、どんなメッ

セージを送りたいのか——、それは子ども自身にならないければ、子どもを知ることにはできないし、描けるものではないでしょう。誰だって子どもであった日があった筈です。

お父さんも、子どもの目の高さになるということは、勿論、腰をおろして姿勢だけを言っているのではなくて、子どもの目線になって、即ち子どもの視野に立ったときに、子どもの本当の姿が見えてくるのではないでしょうか。

(市ヶ尾幼稚園)

